

## 記の文学における自然と人為—中唐期から北宋中期にかけて—

著者	谷口 高志
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 Vol.10 別冊
号	10
ページ	75-78
発行年	2016-03
URL	<a href="http://doi.org/10.34428/00007990">http://doi.org/10.34428/00007990</a>



佐賀大学 谷口高志

ある事物や事象について記述・記録した文である。「記」は、唐代、特に古文が唱揚された中唐期以降に、散文の文体の一つとして盛行し、数多くの作品が書かれるようになる。その扱う内容はさまざまだが、山水自然に関係するものが多くを占めており、当時の文人たちの自然認識や、自然との接し方・関わり方をそこに窺うことができる。

たとえば『**記三**』の作品のうち、とりわけよく見られるのは自然について述べたものだが、『**記一**』『**記二**』の作品のうち、歌謡性（節奏性）が強い。この亭台は自然を觀賞するために作られた人工の建造物であり、當時における自然と人為の関係性について多くの示唆を与えてくれた。また、『**記三**』のなかには、人工の自然というべき庭園を扱ったものや「白鳥居　五雲堂の」など、石や花などの自然物の蒐集について述べたものがあり、これらも自然と人間の関わりについて興味深い内容を含んでいる。

·明·徐師曾『文體明辨』卷四九·記

按《金石例》二二記者，紀事之文也。《禹貢》、《顧命》、乃記之祖，而記之名，則昉於《戴記》《周記》諸篇。厥後雄偉作《蜀記》，而《文選》、《列記》類，劉鑑不著其說，則昉於漢魏以前作者漸失之，其盛唐始也。其文以叙事為主，後人不列其體，顧以議論雜之。故陳師道云：「韓退之作記，記其事耳。今之記乃論也。」蓋亦有感於此矣。然觀《一蕪亭記》，已涉議論，而歐蘇以下，議論浸多，則記體之變，豈一朝一夕之故哉。

《金瓶石名》を按るに、「犯」は「事」を犯すの文なりと。「萬貫・霸命」は、乃ち犯の祖にして、刑の類を列す。則ち『戴記』『學記』の諸語に明する。其の後捕獮・霸命」を作る、而して「文選」其の類を列す。然則其の脱をさざれば、則ち捕獮以前は作者尙少なく、其れ盛んなるは都司以下、始まるを知るなり。其の文は事叙するを以て主爲すも、後人其の體を知らず、顧みるに議論を以て、蓋しこれに據う。故に陳師道云々、一然則之の記作はるは、其の事記すのみ、今戴記は乃ち論なりと、蓋し亦此に據ふ者なり。然に『萬貫』の記、を觀れば、已に議論に涉り、而して戴記以下、漸に漸く多ければ、則ち捕獮の變、豈に一朝一夕の故ならんや。

記が文体として確立し、盛んに書かれるようになるのは唐以後  
 『文苑英華』の記の項目には、唐以前のものは収録せず

·白居易「蘇州南禪院千佛堂轉輪經藏石記」(《朱金坡箋校『白居易集箋校』卷七〇》)夫記者、不唯紀年月、述作爲、亦在乎辨興廢、示勸誡也。

（夫れ記は、唯だ年月を記し、作爲を述ぶるのみならず、亦た興廢を辨じ、勸戒を示すに在るなり。）  
↓記の文体のあり方に自覺的に

・『文苑英華』における記の収録状況

卷七九七・記一　　卷八三四・記三八における分類と作品数

宮殿 1篇 廳壁 10書 翰林 尚書省 御史臺 寺監 府署 簿籍 州郡 監獄 使院 縣職 州  
上佐 州官 典令 具奏 應劭 宴饗 82篇 公署 11篇 館驛 4篇 樓 11篇 閤 3篇 城 4篇  
城門 2篇 木門 3篇 橋 2篇 井 2篇 河渠 5篇 祀廟 15篇 折獄 2篇 學校 4篇 宮  
宰 6篇 釋氏 寺 院 佛像 經 塔 石柱 幢 方丈 42篇 園 5篇 尊像 童子 1

篇、宴遊 1 篇、漢谷丘・園圃・亭・居處・坐・泉・池・竹・山 68 篇、  
 記事 12 篇、列候 2 篇  
 歌樂 3 篇、圖書 5 篇、興亡 2 篇、賞賈 3 篇、誨言 3 篇、雜記 7 篇  
 ↓収録数が多い部類は、廳壁・釋氏・宴遊（廳壁記はその官職（もしくはその序舎）の由來・沿革について記したものの）

※なお宴遊の詠68篇のうち、最も多く作品が採られているのは柳宗元（17篇）。それに白居易・元結（ともに5篇）、獨孤及（4篇）、符載・權德輿（3篇）などが続く。

本表表では、自然をめぐる諸問題のうち、特に自然を自らの手（人爲）によって占有しようとする意識のあり方に焦点をあて、中唐期から北宋中期にかけての「記」の文学を概観してみた。中唐期では白居易と柳宗元、北宋中期では歐陽脩の作品を中心に取り上げる。

·蘇軾「赤壁賦」(孔凡禮點校『蘇軾文集』卷一)

且夫天地之間，物各有主。苟非吾之所有，雖一毫而莫取。惟江上之清風，與山間之明月，耳得之而爲聲，目遇之而成色。取之無禁，用之不竭。是造物者之無盡藏也，而吾與子之所共食。

（且つ夫れ天地の間、物には各其の主有り。苟も吾の有する所に非ざれば、一毫と雖も取ること無し。惟だ江上の清風と山間の明月とは、耳之を得ず声を爲し、目之に遇て色を成す。之を敗るも禁ぜざる無く、之を用うるも竭さず。是れ造物者の無尽蔵なり、而して吾と子との共に食らう所なり。）

・合山究「蘇東坡の自然観」(『目加田博士古稀記念中国文学論集』 龍溪書舎、一九七四)  
この有名な文章は、辛酉に読み過せば、ただ年に風月の限りないすばらしさを謳歌して  
いるにすぎないものであるが、しかしこので注意しなければならないのは、彼が自然  
ない自然然の無限の面直を賞讃するところ、所有の観念を以てこれに對比しな

ことであり、そこに私は宋代ならではの新しい自然（風景）美に対する価値観が含まれていると思うのである。（傍線は引用者による）

合山氏は、「赤壁賦」に見られる自然観を、「物質的『所有』という世俗的価値よりもすばらしい、風景美という精神的価値のあることを見事に喝破した」と誇り、それを「自然美の価値に対する新しい意義づけであった」とする。更にこのような「無所有・無尽蔵」の自然観に類似・関連する、わずかな事例として、李白「襄陽歌」の詩句、

「清風明月不用一錢買（清風明月は一錢の買うを用いず）」（無所有）  
白居易の詩「遊雲居寺贈穆三十六地主」の句、

「勝地本來無定主、大都山屬愛山人（勝地は本來 定主無く、大都山は山を愛する人に屬す）」（無所有）

柳宗元の「始得西山宴遊記」の文句、  
「以爲凡是州之山水有異態者、皆我有也（以爲えらく凡是れ州の山水の異態有る者は、皆我が有なりと）」  
（所有）

などを挙げる。

☆「無所有の自然観」……「所有（占有）の自然観」を前提とし、それへの反動から生まれたもの

## 1 中唐期の記における自然と人

## 1.1 自然の占有

・白居易「草堂記」(宋金城纂校『白居易集箋校』卷四三)

江州の廬山にて自ら造営した草堂について記す。

樂天既來為主。仰觀山、俯聽泉。……今我為是物主。物至致知。各以類至。又安得不外適  
内和、體寧心恬哉。……一旦蹇剝、來佐江郡。郡守以優容而撫我。廬山以靈勝待我。是天  
與我時、地與我所、卒獲所好、又何以求焉。

(樂天既に來りて主と為り、仰ぎて山を觀、俯ぎて泉を聽く。……今我は是の物の主と為り、物至りて  
知を致し、各おの類を以て至る、又た安くぞ外適内和、體寧心恬たらざるを得んや。……一旦蹇剝た  
りて、來りて江郡に佐たり、郡守は優容を以て我を撫し、廬山は靈勝を以て我を待す、是れ天の我に時  
を與え、地の我に所を與ふ、卒に好む所を獲れば、又た何を以てか求めん。)

↓山水の占有(主人となり、好む物を獲得する)——草堂の造営と山水の遊覽

・柳宗元「結歸潭西小丘記」(尹占華・韓文奇校注『柳宗元集校注』卷二九)

永州・結歸潭の近くある丘をめぐる山水遊記。永州八記の一つ。

得西山後八日、尋山口西北道二百步、又得結歸潭。潭西二十五步、當湍而淺者為魚梁。梁  
之上而有丘焉。生竹樹。……丘之小不能一畝、可以縋而有之。問其主、曰、「唐氏之棄地、  
貨而不售。問其價、曰、「止四百。余憐而售之。」

(西山を得て後八日、山口の西北の道を尋めること二百歩にして、又た結歸潭を得。潭の西二十五歩、  
湍に當りて淺きは魚梁なり。梁の上に丘有り、竹樹を生ず。……丘の小なこと一畝たる能わざればは  
以て縋して之を有すべし、其の主を問えば、曰く、「唐氏の棄地なり、貨するも售れず」と。其の價を  
問えば、曰く、「止だ四百なり」と。余憐れみて之を售す。)

↓山水の占有(独白)——丘の購入

・柳宗元「潭州楊中丞作東池戴氏堂記」(『柳宗元集校注』卷二七)

潭州刺史の楊遷が東池とそれを華しむための堂を造営し、それを「世を離れ道を樂しむ者」である  
戴氏に授けたことを記す。

卒授賓客之選者、誰國戴氏曰簡、為堂而居之。堂成而勝益奇。望之若連麓摩崖、與波上下。

……凡觀望浮游之美、專於戴氏矣。……賢者之舉也必以類。當弘農公之選、而專茲地之勝、  
豈易而得哉。地雖勝、得人焉而居之、則山若增而高、水若闊而廣、堂不待飾而已美矣。

(卒に賓客の選者、誰國の戴氏簡と曰うものに授け、堂をありて之に居らしむ。堂成りて勝益す奇  
り、之を望めば麓を連ね、波と上下するが若し。……凡そ觀望浮游之美、戴氏に專らにせらる。  
……賢者の舉るは必ず類を以てす。弘農公(楊遷)の選に當りて、茲の地の勝を專らにするは、豈に  
易くして得んや。地は勝なりと雖も、人を得て之に居らしめば、則ち山は増して高まるが若く、水は闊  
く、感あるが若く、氣は爽るを得たり。……已に致るが若し。)

↓山水の占有(独白)——池と堂の造営

↓山水(勝境)と人為(堂の造営と居住)の関係性に関する言及

・堂の造営によって輝きを増す山水(堂成而勝益奇)

・居住者を得ることで開発されていく山水(地雖勝、得人焉而居之、則山若增而高、水若闊而廣)

(参考)

・白居易「太湖石記」(『白居易集箋校』外集上)

牛僧孺の太湖石への愛好とその蒐集について記す。

古之達人、皆有所嗜。玄暉先生嗜書、韜中散嗜琴、韜師先生嗜酒。今丞相希章公嗜石。……公於此物、  
獨不廉讓、東第南第、列而置之。……擬要而言、則三山五岳、百洞千壑、唯勝簞箱、至在胸中。百仞一  
峯、千里一瞬、坐而得之。……然而自一成不變以來、不知幾千萬年、或委海濱、或淪湖底、高者僅數仞、  
重者殆千鈞、一旦不廉而至、爭奇誇怪、為公眼中之物。

↓山水の占有(蒐集)——怪石の蒐集と陳列(庭園において「三山五岳、百洞千壑」のミニチュア

(模範)を作り、我がものとす)

・柳宗元「桂林裴中丞書家洲亭記」(『柳宗元集校注』卷二七)

桂管觀察使の裴公立が桂州・書家洲に建てた亭について記す。

既成以燕、歡極而賓、咸曰、「昔之遺勝者、必於深山窮谷、人罕能至、而好事者後得、以為己功。……  
蓋非桂山之靈、不足以觀、非是洲之曠、不足以極、非公之鑑、不足以得。」噫、造物者之設是  
久矣、而盡之於今、余其可以無得乎。

↓山水の占有(鑑賞)——亭の造営

## 1.2 自然美の開発

・柳宗元「邕州柳中丞作馬退山茅亭記」(『柳宗元集校注』卷二七。一説に獨孤及「七二五七七

七)の作)

兄の柳中丞が邕州に造営した亭について記す。

歲在辛卯、我仲兄以方牧之命、試于是邦。……乃暨乃塗、作我攸宇、於是不崇朝而木工告  
成。……夫美不自美、因人而彰。蘭亭也、不遭右軍、則清湍修竹、無沒於空山矣。

(歲辛卯に在り、我仲兄は方牧の命を以て、是の邦に試いらる。……乃ち暨り乃ち塗り、我が宇とす  
るを成す。……是に於いて崇朝たらずして木工成るを告ぐ。……夫れ美は自ずから美たらず、人に因り  
て彰るがなり。蘭亭なるは、右軍に遭わざれば、則ち清湍修竹は、空山に無没せん。)

↓山水はそのままで美なのではなく、人によって(人間がそれを見いだし)開発することによつて美となる。

・劉禹錫「武陵北亭記」(『劉禹錫集箋注』卷九)

朗州刺史の竇常が北亭を改修したことを記す。

於是撤故材以移用、相便地而居。去凡木以顯珍茂、汰汚池以通淪漣。自天而勝者、列於  
瞻望。由我而美者、生於顏指。……斧斤息聲、風物異態。

(是に於いて故材を撤きて以て移用し、便地を相じて而して要に居す。凡木を去りて珍茂を顯らかに  
し、汚池を汰いて以て淪漣に通す。又自らして勝なる者は、瞻望に列す、我由りて美なる者は、顔  
指に生ず。……斧斤は息聲を息め、風物は態を異にす。)

↓亭の改修を指示することで、山水の美を生み出す。

・白居易「冷泉亭記」(『白居易集箋校』卷四三)

杭州・靈隱寺の近辺に、歴代の杭州刺史五人が建てた五つの亭の冷泉について記す。

亭在山下、水中央、寺西南隅。高不倍尋、廣不累丈、而最奇得要、地搜勝概、物無遁形。  
……抗自郡城抵四封、巖山複湖、易為形勝。先是領郡者、有相里君造作盧白亭。有韓僕射  
阜作侯仙亭。……及右司郎中河南元黃最後作此園。於是五亭相望、如指之列、可謂佳境殫

矣、能事畢矣。後來者、雖有敏心巧目、無所加焉。故吾繼之、述而不作。

（亭は山の中央、寺の西南の隅に在り。高さ一尋に倍せず、廣きこと丈を累ねず、奇を振りを得、地は勝概を獲し、物に形を遺す無し。……杭は郡城より四封に抵るまで、巖山嶺、形勝を爲し易し。是に先んじて郡を領せし者、相里君造有りて『廬山』を作し、韓侯射畢有りて『侯仙』を作し……右司郎中河南元黃、最後に此の亭を作すに及ぶ、是に於いて五亭相見望み、指の列するが如し、佳境殫き、能事畢れり。優れた景勝は振るり尽くされ、人になすところ、なすべきことは全てやり遂げられたと謂うべし。後來の者、敏心巧目有りとも雖も、焉に及ぶる所無し。故に吾は之を繼ぎ、述べて作らす。）

↓五つの亭の造営によって「物無道形」という状態を作り、「佳境」を全て発掘しつくし、「能事」（山水に対して人がなすところ、なすべきこと）を全てなすに達する。

・山水が人の視野から逃れるのを許さず、その完全なる眺望を人為（夢の造営）によって獲得しようとする意識（地境勝概、物無道形）

劉禹錫「武陵北亭記」（前掲）…亭孤其名、地藏其勝……雖聞茲地、鉛美未發、豈有待邪？

韓愈「燕喜亭記」（『韓愈文集校箋注』卷三）…「凡天作而地藏之、以遺其人乎」・優れた山水に対して人は積極的に働きかけ、人為（夢の造営）によってその美を開発しつくさねばならないという意識（佳境殫き、能事畢矣）

柳宗元「桂林裴中丞書家洲亭記」（前掲）…「噫、造物者之設是久矣、而盡之於今

☆中唐期の記の文学に見られる自然観——亭台・庭園が盛んに作られるようになる背景

・山水は人為を加えることによってこそ、その美を発揮するという認識

・山水に対して、人はなすべき働きかけをなし遂げ、その美を余すところなく、開発しなればならないという意識

亭台・庭園の造営——ただそこにある山水を鑑賞するためのものではなく、隠された山水の美を開発し、より完全で美しい姿を創り出そうとする営み

亭台・庭園に関する記——そうした人の営みを顕彰し、記録・記念するための文学

（参考1）

・白居易「白蘋洲五亭記」（『白居易集校箋』卷七）

湖州刺史の楊漢公が白蘋洲に造営した五つの亭について記す。

至開成三年、弘農楊君為刺史、乃疏四渠、濬二池、樹三園、構五亭、卉木荷竹、丹雘麗室、泊遊宴息宿之具、靡不備焉。觀其架大溪、跨長汀者、謂之「白蘋亭」……觀之「臨波亭」。五亭間開、萬象迭入、向背俯仰、勝無道形。……大凡地有勝、得人而後發、人有心得、得物而後開。境心相遇、固有時耶。蓋是境也、實仰守濫觴之、顏公推輪之、楊君繪素之、三賢始終、能事畢矣。

（参考2）宋代への継承

・歐陽脩「峴山亭記」（『歐陽脩詩文集校箋』一〇三四頁、『居士集』卷四〇）

知襄州の史炤が改修した峴山亭について、峴山にゆかりのある晋の羊祐・杜預に遡りつつ記す。

峴山臨漢上、望之矜然、蓋諸山之小者。而其名稱著於荆湘者、豈非以其人歟。其人謂誰、羊祐叔子、杜預元凱是已。……傳言叔子嘗登茲山、慨然語其屬、以謂此山常在、而前世之士、皆已置諸於無聞、因自顧而悲傷。然獨不知茲山得已而名著也。

## 2 歐陽脩の記における自然と人為

・「有美堂記」（『歐陽脩詩文集校箋』一〇三四頁、『居士集』卷四〇）

梅軾が杭州在任時に、吳山に造営した有美堂について記す。

夫舉天下之至美與其奇者、有不得而兼焉者多矣。故窮山水登臨之美者、必之乎寬閑之野、寂寞之鄉、而後得焉。窮人物之盛麗、誇郡邑之雄富者、必據乎四達之衝、舟車之會、而後足焉。蓋優放心於物外、而此娛富於繁華、二者各有適焉。然其為樂、不得而兼也。

今夫所謂羅浮、天台、衡嶽、廬阜、洞庭之廣、三峽之險、號為東南奇偉秀絕者、乃皆在平下州小邑、僻陋之邦。此固奢之士、窮熱放侈之所樂也。若四方之所聚、百貨之所交、物盛人衆、為一都會、而又能兼有山水之美、以資富貴之娛者、惟金陵之錢塘。……

而臨是邦者、必皆朝廷公卿大臣、若天子之侍從、又有四方遊士為之賓客。故富貴形勝、治亭榭、相與極遊覽之娛。然其於此者、有得於此者、必有遺於彼。獨所謂有美堂者、山水登臨之美、人物邑居之繁、一寓目而盡得之。蓋錢塘兼有天下之美、而斯堂者又盡得錢塘之美焉。宜乎公之甚愛而難忘也。

（夫れ舉、天下の至美と其の奇しきとは、得て兼を兼ねざる者有ること多し。故に山水登臨の美を窮むる者は、必ず寬閑の野、寂寞の郷に之き、而る後に得を兼、人物の盛麗を誇る者は、必ず四達之衝、舟車の會に據り、而る後に足る。蓋し優放は心を物外に放ち、此は遊を繁華に傾し、また二者各の適する有り。然れば其の樂しきを兼ふは、得て兼ねざるなり。

今夫れ謂う所の羅浮、天台、衡嶽、廬阜、洞庭の廣、三峽の險は、鏗して東南の奇偉秀絶ある者にし、乃ち皆下州小邑、僻陋の邦に在り。此固奢の士、窮熱放侈の所樂しむ所なり。四方の聚まる所、百貨の交わる所に於て、物盛んに人衆く、一都會を為し、又た都く山水の美を兼有し、以て富貴の娛しに資するが若き者は、地た金銀・錢塘のみ。

……而して是の邦に臨む者は、必ず皆朝廷の公卿大臣、天子の侍從の若きものにして、又た四方の遊士の之が賓客とあること有り。故に形勝を占め、亭榭を治むるを喜び、相い興に遊覧の娛しみを極む。然るに其の取る所に於いては、此を得る有りば、必ず彼を遺す有り。獨り謂う所の有美堂なるは、山水登臨の美、人物邑居の繁、一寓目に盡く之を得たり。蓋し錢塘は天下の美を兼有し、斯の堂は又た山水登臨の美を得たり。宜なるかな公の甚だ愛して忘れ難きなるは）

山水の美を得ようとする者——辺鄙な深山幽谷でそれを占有

B都市の華やかな美を得ようとする者——人や物が集う繁華な都市でそれを占有

↓二つを「兼有」するのは本来難しいが、錢塘（杭州）に建てられたこの堂のみは

「一寓目」によって両者を「兼有」することができると。

・北宋中期の記については、湯淺陽子氏に準拠。「二衆集」とその変奏——北宋中期における地方官の遊樂をめぐって（『人文論叢 三重大学人文学部文化学系紀要』三一、二〇〇四）があり、人民との遊樂の共有というテーマが繰り返して取り上げられていることを指摘する。

・「浮槎山水記」(『歐陽脩詩文集校注』一〇三頁、「居士集」卷四〇)

知廣州の李靖憲が發見した、浮槎山の泉水(飲料用)について記す。

浮槎之水、發自李侯。……因其水遺余於京師。予報之曰、李侯可謂賢矣。夫窮天下之物無不得其欲者、富貴者之樂也。至於蔭長松、藉豐草、聽山溜之潺湲、飲石泉之潤漚、此山林者之樂也。而山林之士、視天下之樂、不勸其心、或有欲於心、願力不可得而止者、乃能退而樂於斯。彼富貴者之能致物矣、而其不可兼者、惟山林之樂爾。惟富貴者而不得兼、然後富貴之士、有以自足而高世。其不能兩得、亦其理與勢之然歟。

今李侯生長富貴、厭於耳目、又知山林之為樂、至於攀緣上下、幽隱窮絕、人所不及者、皆能得之、其兼取於物者、可謂多矣。李侯折節好學、喜交賢士、敏於為政、所至有能名。凡物不能自見、而待人以彰者有矣、其物未必可貴而因人以重者亦有矣、故予為誌其事、俾世知斯泉發自李侯始也。

(浮槎の水は、發かるること李侯自りす。……因て其の水を以て余に京師に運る。予之に報て曰く、李侯は賢なりと謂ふべし。夫れ天下の物を窮めて其の欲するを得ざる無きは、富貴者の樂しみなり。長松蔭に、豐草藉けるに至り、山溜の潺湲たるを聴き、石泉の潤漚たるを飲むは、此れ山林者の樂しみなり。而るに山林の士は、天下の樂しみを視るも、一として其の心を動かさず、或いは心に欲するも、力の得べからざるを願みて止むる者有り、乃ち能く退きて樂しみを斯に獲。彼の富貴者の能く物を致し、其の兼めるべからざるは、惟だ山林の樂しみのみ。惟だ富貴者にして兼るを得ずして、然る後に山林の士、有て以て自足し世に高しとするのみ。其の兩得する能わざるは、亦た其の理と勢との然せしめんか。

今、李侯は生長し「富貴」たり、耳目に厭き、又た山林の樂しみを欲するを知り、攀緣上下、幽隱窮絶、人の及ばざる所に至り、皆能く之を得、其の物を兼取するは、多しと謂ふべし。李侯節を折り學を好み、賢士と交わるを喜び、為政に敏にして、至る所に能名有り。凡そ物を自ら見ざる能はずして、人を待てて以て彰かなる者有り、其の物未必しも貴とすべからずして人に因りて以て重んぜらるる者も亦た有り。故に予がに其の事を志し、世をして斯の泉の發かること李侯自ら始まるを知らしむるなり。

A 「富貴者」 天下の物を遍く占有することができるが、「山林の樂しみ」のみは兼有できない。

B 「山林者」 (貧賤の士) 天下の物(俗世間の樂しみ)に心を動かさない、もしくはそれを欲してはいるが、「力」が足りないために、「山林の樂しみ」を占有すること自足する。

↓二つを「兼ねる」(兩得)「兼取」のは難しいが、李侯にはそれが可能であり、浮槎山の水を發見し、優れた価値を付与した。

☆人と山水をめぐる関係性の複雑化——「富貴者」と「山林者」

「富貴者」 俗世間(天下)「都邑」の繁華な物

「山林者」 俗世間を離れた山水自然

占有を志す者のなかにも、「富貴者」と「山林者」があり、本来両者は好む対象が異なり、棲み分けができていたはずだが、「富貴者」は時にその枠組みを超えて、山水までもを「兼有」しようとする。山水は「富貴者」も獲得しうるものの一つとなり、その意味に

- 7 -

おいては、俗世間(天下)「都邑」にあふれる繁華な物と同列に扱われる存在となったといえる。一部の「山林者」のみが占有を許されていた山水は、不可侵のものではなくなり、「天下の至美と其の樂しみとは、得て焉を兼ねざる者有ること多し」(『有美堂記』)とあったように、この世界の欲する物を全て得ようとする営みのなかに巻き込まれ、相対的にその価値を減じていったかのようにも思われる。なお歐陽脩は周知のように、古物の愛好家・蒐集家でもあり、たとえば「三琴記」(『歐陽脩詩文集校注』一六九頁、外集卷二二)では、性質の異なる複数の古琴を「兼有」していることが述べられ、「集古録目序」(同、一〇六〇頁、「居士集」卷四一)でも「兼聚」の語を用いつつ、物の蒐集一般に関する議論を展開されている。この「兼有」の語は、歐陽脩にとって山水を始めとする多くの物が占有と蒐集の対象と認識されていたことを示しているだろう。

また右の記では、占有権をめぐる、ある種の争いが繰り広げられていることにも注意すべきであろう。「山林の士は、天下の樂しみを視るも、一として其の心を動かさず、或いは心に欲するも、力の得べからざるを願みて止むる者有り、乃ち能く退きて樂しみを斯(山林)に獲る」という箇所では、「天下の樂しみ」(世俗の樂しみに)に対し、「山林の士」は「力」がないために占有を断念する旨が述べられている(この「力」は、『集古録目序』が説く蒐集論においても、たびたびその重要性を強調されており、たとえば序の冒頭には「物常聚於所好、而常得於有力之運。物は常に好む所に聚まり、常に力を有するの運(強き)に得らる」とある)。それに続く箇所では、更に「彼の富貴者の能く物を致し、其の兼ねるべからざるは、惟だ山林の樂しみのみ。惟だ富貴者にして兼ねるを得ずして、然る後に貧賤の士、有して自足し世に高しとするのみ」(「山林の樂しみ」は、「富貴者」がそれを兼有できないからこそ、「山林者」(貧賤の士)が占有し、世に貴重なものとしてありがたがる「世に高しとする」ことができる)とある。「山林」の価値が明確に相対化されて捉えられており、「富貴者」が取り残したものであるがゆえに、「貧賤の士」がそれを我がものとして、誇ることができるといえるのである。ここには「山林者」「富貴者」との間における、占有権の駆け引きのようなやりとりを見取ることができるのではないだろうか。

中唐期においては、山水と人は一対一の関係にあり、占有されるものと占有するものが存在するだけであった。一方、歐陽脩の場合、山水に対して複数の種類の人間が存在し、互いに牽制し合う関係にある。占有者同士の関係性に意識が及び、山水を開発し占有することが、文人社会のなかでどのような意義を持つかということが、問われるようになっていくのである。

中唐期…山水Ⅱ人によって開発され、占有されるべきもの

人がその美を見いだし、価値を付与する対象

山水の価値の相対化が進む

歐陽脩…山水Ⅱ人と人が兼有・蒐集を競う対象

- 8 -